

東京バッハ合唱団 月報

[第 670 号] 2018 年 4 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101
Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604
Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 670

April 2018

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

第 116 回定期演奏会の上演プログラム

BWV 176, 177, 178

3 曲のカンタータに、バッハの本心をのぞく

大村 恵美子 (東京バッハ合唱団主宰者)

来たる 5 月 12 日の第 116 回定期演奏会にとり上げた BWV 178、176、177 と最後に BWV 1、という 4 つのカンタータ。4 つめの《あしたに輝く 妙なる星よ》は、文句なしに美しく楽しいものとして有名で、これだけでも聞きたい、と思われる方も多いでしょう。

その一方、ほとんど聴くことのなかった他の 3 つのカンタータは、とても真摯な感じの、3 つとも短調の、手ごわくとりつき難い作品——、というので、戸まどう方もあるかも知れません。

しかし、音取りの進んだ合唱団員からは、「すばらしい内容の、歌い甲斐あるもの」と、積極的な姿勢が伝わってきます。私も、偶然にも作品番号が接したこれら 3 つのカンタータを並べて検討したとき、異様な、バッハの本心に突きあたった直感をえました。演奏者、次いで初めてご披露するときの聴衆の方々の、実際の反応をととても注目したく思いました。チラシ作成の段階では、3 曲とも「日本語演奏初演」と書きましたが、よく調べてみると、BWV 178 のみは、創立 4 年目 (1968 年) の第 15 回定期で上演しています。ちょうど半世紀前のことでした。

ところで、その、バッハの本心とは、どんなものか？これを言葉で説明するのは、至難ですが、手がかりのひとつとして、私はここで、3 つのカンタータの結論でもあるべき最終コラールを、上演順に、以前の紹介 (2017 年 7 月号月報「第 116 回定期演奏会、選曲の意図」と重なりますので、冒頭だけとりあげてみようと思います。

1) BWV 178 《主 われらに いまさずば》第 7 曲：

敵(あだ)の謀(はか)りごと
念(おも)いのすべて 主に知られたり
……

2) BWV 176 《抗い また怯むは こころの常》第 6 曲：

み国の戸めざし われら進みゆかん
かしこにて歌わん こぞりて永久(とわ)に
……

3) BWV 177 《呼びまつる 主イエスよ》第 5 曲：

戦い抗(あらご)う 弱きわれを
ただみ恵みこそ 強めたもう

……

[BWV 1 を含め、全訳詞は合唱団のホームページ「出版局/歌詞 [上演用] 公開」に掲載。ご参照ください]

人生は悲喜こもごも、幸運、不運入りまじり、私たちはそこにどっぷり浸りたくなったり、逃げ出したいなったりを交替させながら、過ごします。

これらの 3 つの作品を、BWV 178 (1724 年 7 月)、BWV 176 (1725 年 5 月)、BWV 177 (1732 年 7 月) と、私は作曲初演年代順に並べかえてコンサートにけることにしたのですが、そうすれば、バッハの実生活の心情に寄り添った流れとしても眺められるのではないかと感じられたからです。

1) BWV178/7 (カンタータ第 178 番の第 7 曲、以下同様に略記) のコラールでは、さんざんに攻め寄せてくる屈強な敵に向かうのに、とても自信なく、神の見守りに、つよく訴える。神の明るい秩序の統治がゆきわたるように、と切願するが、自分も神の庇護のもとに逃げこもうというのではなく、自分こそが〈堅く立って〉終わりまで生き遂げられるように、と自らをふるい立たせています。

第 116 回定期演奏会

“敵を赦し、天では神の子 すべての友に”

2018 年 5 月 12 日 (土) 14:00 開演
武蔵野市民文化会館 小ホール

カンタータ第 178 番 《主 われらに いまさずば》

Wo Gott der Herr nicht bei uns hält BWV 178

カンタータ第 176 番 《抗い また怯むは こころの常》

Es ist ein trotzig und verzagt Ding BWV176

カンタータ第 177 番 《呼びまつる 主イエスよ》

Ich ruf zu dir, Herr Jesu Christ BWV 177

カンタータ第 1 番 《あしたに輝く 妙なる星よ》

Wie schön leuchtet der Morgenstern BWV 1

<出演者><入場券>等、詳細は次ページ

2) BWV176/6 のコラール。ここでは、最終目標として、神のもとに至ろうと志して、その達成のあかつきには、大きな神の愛をほめ歌おうと希望している。

3) BWV177/5 になると、ひたむきに救い主のもとを目指してきた自分を、ゆるめた目で見られるようになった感じで、悪戦苦闘してきた〈弱きわれを〉、支えていただけるのは、〈ただ み恵み〉だけなのだ、すがりつく。最終コラールではないけれど、第3曲ソプラノアリア（同コラールの別の節）では、〈われ心より敵を赦さん われをも赦したまえ〉と歌い出します。自分の立場ばかりにこだわる姿勢から、やっと他の人間——しかも敵である人間も含めて——の立場にまで気づくゆとりが、あらわれるのです。これでこそ終結点といえるのではないのでしょうか。

引きずりおとす勢力をきっぱりと斥けることの危なっかしいこの私を、どうか見すてないでください。どれほど主の愛に感謝し、ほめ歌をささげようとも、人間はゆれ動くもの。どこまでも支えを必要とする。それがかえって、われら人間には、大きな力となり、喜びとなり、幸せとなるのだ。神からは友と呼ばれ、わが子と呼ばれても、これがわれら人間存在の、真のありようなのだ——そんなバッハの声が、私には伝わってくるように思われるのです。この公演を、“敵を赦し、天では神の子 すべての友に”のテーマでまとめてみようと思った次第です。

カンタータを単に、礼拝用に歌うセレモニーのように受けとって、難しい、ややこしい、などと他人行儀に接しないで、ぜひそんなバッハの本心の声に、耳を傾けてほしいものです。演奏会当日までには、歌いこみを重ね、「バッハの本心」をぼかすことなく、明確にみなさまにお届けできるようにいたしましょう。

とくに、日本語演奏初演の曲、いずれも名曲です。ご期待ください。

「第2年巻」コラール・カンタータを中心に

大村 健二（団員）

偶然から一つの公演を組み立ててみる（前稿「3曲のカンタータに、バッハの本心をのぞく」というのは、バッハのカンタータ上演を志した高校在学中から70年にわたって、ほぼすべての日々にそれらの作品群が傍らにあった、主宰者ならではの“軽み”でしょうか。

それを承けて、各曲の内容をご紹介しようと思えます。まずは4曲の上演曲目を、バッハの全カンタータ作品のなかに位置付けてみると、とても興味深いことが見えてきます。結論を先に言えば、4曲すべてが、バッハのカンタータ「第2年巻」に関わるということです。

第116 回定期演奏会

<出演>

ソプラノ＝光野孝子、アルト＝佐々木まり子
テノール＝黄木 透、バス＝小藤洋平
オルガン＝草間美也子
オーケストラ＝東京カンタータ室内管弦楽団
合唱＝東京バッハ合唱団
指揮＝大村恵美子

<チケット>

前売り 3500 円（全席自由）

事務局にて発売中。メール・ファックス・電話等にて「月報」タイトル囲み内の宛先へご注文ください。
①枚数、②お名前、③ご住所、④連絡のための電話番号/アドレスなど、が必要です。

<後援会員・団友の皆さま>

「招待状」の発行について

前回送付の月報（2月号/3月号同時発送）に、上記公演のご招待についてのご案内を致しました。今回の会場は「小ホール」になりますので、座席確保のため、特別にご来聴希望の方（ご予約で結構です）にのみ、招待状を発行いたします。前回同封の返信用ハガキをご利用ください。また、お電話・メール等でも受け付けますので、お申し出ください（4/12 締め切り）。

前世紀の後半あたり（1960年代）から、バッハの作品と生涯の全貌がかなり詳細に見渡せるようになりました。今では、ほとんどのカンタータがその初演年（日付けに至るまで！）を確定できるようになっています。その視点からこの4曲のプログラムを俯瞰してみます（上演順、丸括弧内は初演年月）。

1) 第178番《主 われらに いまさずば》

BWV 178 (1724年7月)

2) 第176番《抗い また怯むは こころの常》

BWV 176 (1725年5月)

3) 第177番《呼びまつる 主イエスよ》

BWV 177 (1732年7月)

4) 第1番《あしたに輝く 妙なる星よ》

BWV 1 (1725年3月)

カンタータ番号の3ケタの数字が隣り合っていること、劈頭の1番があることといった、外見的にはBWV番号そのものが気にかかります。また、初演の時期をくらべてみると、1)、2)、4)の3曲が、1724年7月から翌年5月まで（トーマス・カントル就任の第2年目）の1年弱の間にまとまっていて、3)の1曲だけが7年半ほどのブランクをへて突出していること、も目につきます。バッハのカンタータに長年、馴染んでいらっしゃる方々には、煩わしいかも知れませんが、当プログラムの本質に関わることがらでするので、もういちど整理しておきます。

◆バッハ・カンタータの番号と「BWV」のこと

ヨハン・ゼバスティアン・バッハが亡くなったのが1750年のことでした。「理性の世紀」と呼ばれる18世紀のど真ん中です。歿後、トーマス教会においてさえも、数曲のモテット作品以外には、この偉大な前任者の遺作が用いられることは少なかったようです。時代が、もはやカンタータやオラトリオなどの礼拝用音楽作品を必要としなくなっていました。ヨーロッパ世界での啓蒙主義思想の抬頭は、バッハの活躍の時代にすでに、ドイツの諸都市でも圧倒的な勢いをもち、プロテスタント教会のなかにまで「理性（偏重）」の神学の影響力が高まっていて、任地ライブツィヒのみが、ルター正統派の砦として、バッハのカンタータを中心とした教会音楽の隆盛を熱烈に支えています。が、勢いも1750年をピークとして、バッハの仕事も、彼の死去とともに（あるいは、その十数年前から）忘れ去られていったようです。

この文脈の中では、冒頭に演奏されるカンタータ第178番に「理性（Vernunft）」という歌詞が登場することに触れておくにとどめます。訳詞では〈いざ 黙（もだ）せ ゆらぐ理性（こころ）よ！〉（第6曲テノール・アリア）、および〈信仰に抗う 人のこころ 空し〉（第7曲コラール）の2か所です（後述、次号月報）。

教会音楽作品をふくむバッハ音楽の再評価が、ようやくなされるようになったのは、歿後80年ほどを経た、メンデルスゾーンによる《マタイ受難曲》の復活上演（1829年）がきっかけになったことは有名です。ベルリンのジングアカデミーという愛好家団体での演奏であり、教会の外での話であったことに注目してください。ドイツの統一運動の熱気にも押されて、「ドイツ」の「偉大な音楽家」バッハの価値が高まります。歿後100年を期して「バッハ協会」が設立され（1850年）、翌年、教会カンタータ10曲の楽譜を集めて第1巻とし、「（旧）バッハ全集」の刊行が始まりました。この第1巻目の冒頭をかざった作品こそ、今回定演の最終曲、後にカンタータ第1番と呼ばれることになった《あしたに輝く 妙なる星よ》でした。

なぜこの曲が、全集の巻頭に置かれたのか、当巻の編纂者の説明を目にしたことがないので、分かりません。バッハ学者の間では自明のことなのでしょう。収載の10曲は、今日、カンタータ第1番（BWV 1）から第10番（BWV 10）と呼ばれている作品です。1番以外にも、4番《キリスト 死に繋がれしが Christ lag in Todesbanden》、6番《とどまれわれらと 夕闇せまり Bleib bei uns, denn es wird Abend werden》、8番《み神よ わが死はいつ Liebster Gott, wenn wird ich sterben》など、有名な人気作品ばかりです。すべてが、バッハの時代も今日も、ドイツの人々には馴染のコラールの旋律と歌詞を柱としたコラール・カンタータであること、10曲中9曲のオリジナル・パート譜がトーマス学校に所蔵されていたこと（当巻編集者 M.ハウプトマンは、当時

のトーマスカントル）などが共通点として見えてきますが、選曲の根拠は分かりません。ただ「コラール・カンタータ」こそが、バッハ自身に到達点と考えていた教会カンタータの理想の姿であった、という当時のバッハ学者たちの観方が反映されているらしいことは想像できます。

それにしても、10曲の並べた順番が、アルファベット順にでもなっていればすっきりするのですが、第1番が Wie schön leuchtet der Morgenstern と W に始まりません。つづいて A からではあるのですが、Ach Gott, vom …（BWV 2）、Ach Gott, wie …（BWV 3）、Christ lag …（BWV 4）、Bleib bei uns …（BWV 6）、Christ unser …（BWV 7）、と微妙にずれているので困ります。ついでに残りの頭文字だけ並べておくと、Wo（BWV 5）、Liebster（BWV 8）、Es（BWV 9）、Meine（BWV 10）となり、もはやデタラメです。しかし、この綺羅星のごとき名曲のなかで、「明けの明星」あるいは、キリスト誕生への「導きの星」にも擬せられる《あしたに輝く 妙なる星よ》を、第1番に掲げたくなくなった気持ちは理解できます。17世紀以来、ドイツ人の魂をとらえ続けてきた、フィリップ・ニコライのコラールを土台としたこのカンタータに、バッハ・カンタータの代表としての、栄えある第1番の名誉をあたえることに異存はなかったと思われる。

後にわれわれがカンタータ番号で呼ぶようになった、そもそもの出発点がこの旧バッハ全集での掲載順にあったわけですが、第1巻発刊から37年後の第35巻（1888年刊）が、教会カンタータの部門としては、10曲ずつの編纂で刊行をつづけた第18冊目にあたり、第171番から第180番までを収載しました。お分かりのとおり、今回ステージの3曲、BWV 176、177、178がこの一冊に収まっています。

ところで、ここまでの叙述の中で、自明のごとく BWV 番号をつけていますが、これが、シュミーターというドイツの音楽学者が著わした『バッハ作品総目録 Bach-Werke-Verzeichnis』（これ自体が長いタイトルの略称で、さらにその3語の頭文字をとって「BWV」と称す）の分類整理番号であることはご存じのとおり。この目録は、バッハ歿後200年を期して発刊されました（1950年）。これは旧バッハ全集（1851-1899年）を基本の資料としての著作ですから、今日の豊富な知見からすれば、多くの不明点や誤認が指摘されます（1990年に改訂版発行）。それでも、愛好者の間では大いに流布・普及し、今や BWV 番号なしでは話もできません。やや不合理な編集方針の目録ですが、音楽作品が先ずとり上げられ、その最初のグループが教会カンタータで、旧全集の刊行順に番号が振られましたので、お蔭でカンタータ番号（旧全集の刊行順）と BWV 目録の番号が同じになりました。

因みに、改訂前の目録での最終番号は BWV 1080 で《フーガの技法》に当てられていますが、その後、資

料の新発見のたびに、ジャンルに関わらず番号が追加され、知る限りでの最新は、2008年にオークションに出品された、旧全集の編纂委員 W.ルスト氏の遺品中にあったオルガンのコラール・ファンタジーで、BWV 1128 です。これが偶然ですが、今度のステージの第1曲、カンタータ第178番《主 われらに いまさずば》のコラール主題そのものの編曲でした。したがって、曲名ももちろん同名です。BWV 1 (劈頭) と BWV 1128 (最新) とが、われわれの公演で出会いました。これも愉快です。

◆バッハのカンタータ「第2年巻」をめぐる

バッハ歿後200年の1950年は、「BWV」の出版年であったと同時に、「新バッハ全集」の計画が提案された年でもありました。翌年から編纂・校訂作業が始まり、1954年には、第1巻が教会暦順に並べられた「待降節カンタータ」の巻として世に出ました。前後して、年代設定の決定的な研究のピークが訪れ(1957年のA.デュルの研究成果など)、先に述べたように、今日では多くのカンタータ作品の初演日が確定されています。

とくに、バッハがライプツィヒに移住し、トーマスカントル職に就いた初年の1723年6月(三位一体節後第1日曜日)から、2年目の25年5月(三位一体節)に至るまでの約2年間は、カンタータが必要とされる、ほぼすべての日曜日と祝祭日に、今日知られているバッハ作品が隙間なく当てはめられました(数曲の欠落あり)。ということは、バッハはほぼ毎週1曲の新しいカンタータを作曲・初演しつづけたわけですから、多忙なライプツィヒ市の音楽監督職とトーマス学校教師などをこなしながら、あの傑作の数々を作曲するということがどれほど大変だったか見当もつきませんが、次から次と歌われるトーマス学校の生徒たちの身にも同情せざるを得ません。初年度の1年分が「第1年巻」であり、2年度目からの1年分が「第2年巻」です。

この「第2年巻」は、コラール・カンタータの形式で教会暦1年分のレパートリーを埋め尽くしてみようとする、明確な意図をもって開始されたものです。この「コラール・カンタータ年巻」の第8作目がBWV 178です(1724年7月30日、三位一体節後第8日曜日)。ところが、この企図は、残り10数回の演奏機会を余して、突然中断されました。連作の最後(第39作目)となったのが、今回のBWV 1でした(1725年3月25日、マリアの受胎告知の祝日)。教会暦の残りを満たすために、バッハは、ある詩人の助力を得て台本を確保し、この第2年巻を完成させました。その巻末がBWV 176で、1725年5月27日の三位一体節に初演されたものです。このように、今回の演目4曲のうち3曲が、バッハの第2年巻カンタータであることが分かります。

さらに、面白いことには、第2年巻の三位一体節後第4日曜日(「コラール・カンタータ年巻」の第4作目に当たる順番)は、この日が7月2日で「マリアのエ

リサベト訪問の祝日」に重なったため、慣例により後者の主題でカンタータが演奏されました(BWV 10《わが魂 主をあがめ Meine Seel erhebt den Herren (マリアの讃歌)》)。結果として、前者の聖書箇所にもとづくカンタータは欠落します。それを8年後の教会暦当該日に補填したのがBWV 177だったのです(1732年7月6日初演)。

こんな細かいことにこだわるのは何故かというところ、こうした理由、その他によって、複数の「年巻」(息子の一人によると、父バッハが残した年巻は5セット)を整理しつつ、生前のバッハは、自筆楽譜の束をつくっていったのですが、歿後の遺産分けの後、それらの資料はさまざまな経路と運命をたどって、旧全集の編纂者の手許にいたり、BWV 目録に掲載されて、今日にいたった過程を想像してみたかったからです。BWV 番号が並ぶのには、上記のような事情があったことを理解して、各曲を見直してみれば、また違った感興が湧くのではないのでしょうか。

紙数が尽きました。各曲の内容は、次号の月報(5月号)が公演の前にお届けできれば、そこに掲載させていただきたいと思います。最悪でも、5月12日の公演当日のプログラムに間に合うよう、努力します。

E-C7

春からの活動

○4/7(土) 14:00、会場: 荻窪教会

荻窪教会イースターコンサート

入場無料 ◎要予約 (整理券: 申込み順 100枚)

<4/8と両日共通プログラム>

曲目: BWV 42 抜粋、BWV 4 全曲、BWV 31 抜粋

演奏: Ob 桜井哲雄、Vn 中川典子、VC 木島洋一郎、

Org 小久保美希、大村恵美子・指揮

○4/8(日) 14:00、会場: 目白聖公会礼拝堂

目白聖公会創立100周年記念イースター音楽会

主催: 目白聖公会(一般の入場希望は、直接、主催者へお問い合わせください。03-3951-5010 目白聖公会)

○5/12(土) 14:00、会場: 武蔵野市民文化会館(小)

第116回定期演奏会(詳細は、本紙の囲み、チラシ)

○6/30(土)、会場: 荻窪教会

東京バッハ合唱団創立記念日 小コンサートと懇親会

曲目: BWV 178、BWV 176、BWV 177、BWV 1(抜粋)

○8/2(木)~5(日) 野尻湖合宿(詳細続報)

ワークショップ(8/3)、会場: 野尻湖公民館

湖畔のチャペルコンサート(8/4)、会場: 神山教会

○12/15(土) 14:00、会場: 武蔵野市民文化会館(小)

第117回定期演奏会

曲目: 《クリスマス・オラトリオ》前半3部

カンタータ《頌むべきかな 年終り》BWV 28